

あいかわらず 長い編集後記 第4号

編集長(ダン シロウ)

■一年経った。初めの目標通り、季刊で4冊刊行できたのは、先ず連載執筆者諸氏の協力の賜である。有り難うございます。そして編集は私と千葉晃央君で分担、最終的にホームページにPDFでアップしてくれるのは、事務局長の川原さんだ。こういった作業は、それぞれの段階の見えないところで、思いがけない手間がかかっていたりする。誰かが上手くやってくれているのだろう・・・なんて、普段思っていることが、少しトラブルを抱えると、その対応に尽力してくれている人の有り難みがよくわかる。

きちんと役割を果たしてくれる諸氏を確保できていることが、定期刊行できた要因だ。

■3月5日・家族心理学会主催WSを東京で行った。私と早樫さんの二人で6時間のプログラムを実施したのだが、その事前参考資料にマガジン連載の「家族造形法の深度」を案内しておいた。当日、何人もの方がプリントアウトしたものを持ってきておられた。

こういう使い方がマガジンの利用法として、薦めていきたいもののひとつだ。

■新連載の脇野千恵さんは、中学校の現役教師。編集長は長いつきあいのある人で、お嬢さんの雅子さん（県立高校教員）も家族療法

研修で関わりがある二世代の繋がりだ。性教育に頑張ってきた脇野さんに相談されて、「ちんちんがやってきた」（学苑社）という一男の子のお母さんになったとき読む本—のプロデュースをした事もある。

松本君、坊君は大学院の卒業生で、開業と大企業内と、それぞれこの領域で、活動の場を得て活躍中だ。しかしそれだけでは十分とは言えない！というやや厳しい注文中で、彼らに男性援助問題のテーマが課せられた。

自殺、犯罪、DV、ひきこもり等、男性に偏りがちな現象のメカニズムは、個人の問題に還元して終了というモノではないだろう。ニコイチでの連載という初の試みで、1, 2回同時掲載になった。領域だけではなく、多世代から幅広く、対人援助学の今がマガジンに反映されるといい。

次号No.5からの新規連載も既に予定されていて、ますます様々な分野からの、レポートをお届けできると思う。どうぞ、お知り合いにも教えてあげてください。今編集長はツイッターとfacebookで、このマガジンのPR活動展開中です。フリー（無料）でこの中味は、あまり空腹でもない時に、おごってもらった大盛りの天井ぐらいの、ありがた迷惑さ十分だと思います。

■ご覧いただいたように、第3号で失敗した執筆者プロフィール欄が変身で、装いも新たなフロント・ページとしてデビューしました。長すぎると思う方もあるかもしれませんが、あそこしか読まないという読者も想定してのことです。

なお、気がつかないと思いますが、執筆者@短信（到着順）とわざわざ明記していますのは、「ついたー」順という使い古しの英和駄洒落です。（「誰も気づきません」と千葉君に言われたので、書くことにしました）さすがオヤジでしょ。

■さて対人援助学会：定例会 次回は5月

20日(金)、19:00から21:00。京都駅前キャンパスプラザ6F 立命館大学教室で。

演題・演者は未定ですので、学会hpをご覧ください。そして是非ご参加ください。オープン参加、参加費無料の企画です。

■記事に対するご意見、ご感想もですが、執筆者への様々なリクエストもお寄せください。

マガジンに対するご意見ご感想

danufufu@osk.3web.ne.jp

学会時にも販売しましたが**印刷版対人援助学マガジン**(1号、2号、各1000円、第3号1300円)が少数ですが編集部にあります。ご希望の方はメールでお知らせください。メール便で発送します。

マガジン編集部

604-0933 京都市中京区山本町438

ランプラス二条御幸町402 仕事場D・A・N

編集員(チバ アキオ)

■「自分自身が、『これがいいっ!』って思ったら、それでいいんですよ。」淡路島にある「アート山 大石可久也美術館」に行った時、大石可久也氏はそう話していた。ご自身の制作活動もちろんされながら、その一方で自分が『これがいいっ!』って思った物も館内に置いてあった。なかには「釣りのウキ」なんかもあった。その曲線、流線形が素晴らしいということであった。

■アーティストは、自分の感性、判断だけに基づいて活動をしていく。それは自分を信じてることができるかだ。援助職はどうだろう。援助職は、それだけではない側面が多くある。相手をとらえる時に自分の感性、判断は外す作業が行われる。ソーシャルワークの原則でいうと「非審判的態度」だ。私の印象として、援助職という進路選択をした人の傾向として、「対象者との関係性からの自己証明」、「援助

というよいことをしているという道徳的評価」など、他者や外部から由来するもの、もたらされるものによって、現場で仕事をしていることも多いように思う。また、「自分を信じる」ではなく、対象者という、「他者を信じる」ということは強調される。しかし、「自分を信じる」なんてことはあまり強調されない。かといって、これは援助職云々ではなく、仕事をする人として、もっというならば、人間としての普遍的課題だろう。仕事でうまくいかない時、援助職は「制度がダメだからできない」、「労働条件がこれだからできない」、「上司がああだからできない。」というのはよくきく。でも、自分を信じていけないという部分もどっかにあるんじゃないかと思う。自分自身に一步踏み込む、これまでにない負荷をかけることへの不安だ。

■編集作業が2つ重なった。編集作業では、援助職者である自分になじんだ、いつもよく使う思考回路とは少し違う、自分の感性、感覚を信じて、どんどん決断していかななくてはならない。デザイン、サイズ、レイアウト…。そんな経験から、援助職者だからこそ、得られるものも多いように思う。援助職と芸術的な活動は、相性がいいじゃないかとあらためて思った。

■朝5時半に起きて、30分かけてストレッチ、6時に家を出発。途中6時半に仲間と合流して野球場へ。7時から、2時間練習。内野ノック、アメリカンノック、ダブルプレーの練習、トスバッティング、フリーバッティング…。9時に終了して、仕事へ。そして、夜は食事会。京都国際社会福祉センターの社会福祉士養成課程同窓会、職場、大学院つながり。職種は、介護福祉士、社会福祉協議会、知的障害者施設、高齢者施設、カウンセラー、作業療法士とバラバラ。年代も20代から50代まで。対人援助学マガジン執筆陣のような多世代・多職種。

■少し前に（ずいぶん前かも）職場の後輩坂口匠君に教えてもらったのが「ネット充」（ネット上での充実した生活）、「リア充」（リアル世界での充実した生活）というとらえ方。ネット上に公開される「対人援助学マガジン」。リアルでは先日の対人援助学会第2回大会の対人援助学マガジンワークショップ。ツイッターでも、執筆者間のフォローがどんどんできて…、こちらはネット充？…こうしていると、そんな二分論もできないぐらいに、ネット上でも、リアル世界でもつながっていく。そのつながりのありがたさは、結局すべてクライアント、社会に還元されるべきもの。その役割を私たちは負っているのだと考えたりしながら、でも、一番は「たのしいしね～」と思っただけの編集、編集、編集 days（昭和 J-POP 風）…でした。

対人援助学マガジン

No. 4

第一巻第四号

2011年3月15日発行

<http://humanservices.jp/>

対人援助学会事務局

〒603-5877 京都市北区等持院北町 56-1
立命館大学大学院応用人間科学研究科内
TEL:075-465-8375 FAX:075-465-8364

対人援助学会事務担当

入会・退会・変更届

〒540-0021 大阪市中央区大手通 2-4-1

リファレンス内

TEL/FAX 学会専用:06-6910-0103

表紙の言葉

十年近く前になるが、それまで二十年間、大阪梅田の現代画廊で、毎年春に「ぼむ」マンガ展を開催していた。「ぼむ」というのは私が学生時代最後の年に、産経新聞で一コマ漫画の連載をすることになり、その時一緒になった若手漫画家で結成した大阪のマンガ家グループである。それ以来四十年、今も月に一度のペースで顔を合わせる初老のオヤジ達だ。比較的早い時期に次々と同好の士が集って現在に至る、チョット他にない漫画集団である。

篠原ユキオ（今、朝日新聞の夕刊に「肉球入魂」というベット漫画を長期連載中。京都精華大学漫画学科教員）は最初からのメンバー。桂南光さんは漫画家になりたかったのに、桂枝雀さんが大好きで一番弟子になったと語るメンバー。カワキタカズヒロくんは、一番画業専念で、絵本やユーモアイラストの世界で活躍している。柳たかお君（宝塚造形芸術大学教員）と、篠原、カワキタ（二度）は、みんな読売国際漫画大賞グランプリ受賞者だ。この賞は年一回、世界規模で一万点以上の応募があった大きなコンクールだったが、数年前になくなった。私は残念ながら優秀賞どまりだった。他に、国府、野々口、外村、坂口（経理担当）の計九人。こんなメンバーで、長々と展覧会や漫画誌「ぼむ」刊行、ユーモアエクスプレスKKの発足などを続けていた。

そんなある年の展覧会で、老人を扱った漫画をまとめて描いたのも、もう十年以上前。その一枚が高齢者御一行様の絶叫コースター体験ツアー。B2サイズの原画は、会場お買い上げの古川秀明君が今も持っているはずだ。

2011/03/15 団士郎